「近世後期と幕末の関白・天皇」趣旨説明

朝幕研究会

二〇一四年九月二七日と二八日の両日、学習院大学（北2号館10階大会議室）において「近世の天皇・朝廷研究　第6回大会」を開催致します。一日目は「近世後期と幕末の関白・天皇」のタイトルでシンポジウムを企画し、二日目は自由論題研究報告を行います。

朝幕研究会では、大会シンポジウムを、過去に「近世朝廷の女性たち」（第2回大会）、「近世の天皇・親王・公家の家職」（第3回大会）、「武家伝奏と禁裏小番 ― 中世・近世との比較から ―」（第5回大会）と三つのテーマを掲げて企画・実施してまいりましたが、前回大会の、「中世・近世権力構造の比較研究」という論点に引き続いて、さらに「近世・近代の権力構造の比較研究」という論点についても大きな関心をもってまいりました。

ところで、近世後期の天皇・朝廷に関する研究は、宮地正人氏（「朝幕関係からみた幕藩制国家の特質」『人民の歴史学』四二号）が、寛政期以降の朝幕関係の変化についていち早く段階的にとらえ、幕末の政局における天皇の存在を政治・機能的に分析したことを皮切りに、羽賀祥二氏（「開国前後における朝幕関係」『日本史研究』二〇七号）や高埜利彦氏（「後期幕藩制と天皇」『講座・前近代の天皇　第2巻』青木書店）らによって、近世後期の天皇・朝廷の権威の浮上の契機が分析されました。そして、藤田覚氏（『近世政治史と天皇』吉川弘文館）による精力的な研究によって、寛政期以後の朝幕間の多くの事例が発掘され、天皇・朝廷の主体的な営為に着目し、内外の国家的危機を背景に天皇・朝廷の政治的な権威の浮上に結びついたとする見方が示され、近世後期の天皇・朝廷の問題に関して議論を呼びました（井上勝生「（書評）藤田覚著『近世政治史と天皇』」『日本史研究』四八八号）。

一方、幕末維新期の研究においては、箱石大氏（「安政期朝廷における政務機構の改変 ―『外夷一件御評議御用』の創設を中心に ―」

（『国史学』一四五号）や原口清氏（「文久二、三年の朝廷改革」『名城商学』四一巻別冊）、井上勝生氏（「幕末政治史のなかの天皇―安政期の天皇・朝廷の浮上について―」『講座・前近代の天皇第2巻』青木書店）、高橋秀直氏（「文久二年の政治過程（上）―開国論から尊攘論へ―」『京都大学文学部研究紀要』四二号）らによって、それまでの幕末史で手薄であった朝廷の動向について考察がなされ、朝廷内部の政治的変動に分析のメスが入れられる端緒となりました。また、家近良樹氏（『幕末の朝廷　若き孝明帝と鷹司関白』中央公論新社）は、藤田氏の、光格天皇と孝明天皇とを強く関連づけ光格・仁孝・孝明天皇三代を連続的にとらえることを批判し、近代の天皇親政の始点を安政五（一八五八）年に求め、摂家支配を打破ろうとした孝明天皇自身の動向に着目した井上勝生氏の研究にも批判を行いました。

家近氏の研究は、その重点が孝明天皇の在位期にあるため、必ずしも近世後期の研究課題が解明される方向性を直接的にもっていませんが、天皇・朝廷の浮上の起点については、寛政期から安政期に至る朝幕間の変化とともに、さらに実証的な研究の蓄積が必要だと考えられます。勿論、幕末期における朝廷権威の浮上という問題について、安易に、近世後期における朝廷の浮上と結びつけることには問題点があるかもしれませんが（宮地正人「明治維新の論じ方」『駒沢大学史学論集』三〇号）、近世後期の研究と、幕末維新史研究とをどのように結びつけて研究を進めていくかは大きな課題ではないかと思われます。

そこで、今回のシンポジウムでは、「近世後期と幕末の関白・天皇」というテーマを掲げ、長坂良宏氏が、「近世後期の関白と天皇・院」というテーマで「文政期の天皇・朝廷」について分析を行います。そして、家近良樹氏が「幕末期の朝廷について―何が言えるのか―」というテーマで、孝明天皇を中心として「幕末期の朝廷」の分析を行います。また、コメンテーターに箱石大氏をお迎えし、近世後期と幕末史の研究動向や史料上の問題に触れつつ、両報告についてコメントを行ってもらいます。近世後期の関白鷹司政通の長期在任と幕末期の関白補任状況、両期における摂家の機能等を比較検討するなど、興味深い論点の提示が期待され、このシンポジウムを機に、近世後期と幕末維新期との研究の接続の問題が今後一層活発に議論されることを期待して、趣旨説明と致します。

（文責　田中暁龍）